

あります」

このような思いから保育園を開園したのは、1978年のことだ。認可外からのスタートであったが、日曜学校の影響もあり、34名と予想外に多くの入園児があった。

平山理事長は「想定していたことでしたが、子どもの信頼もグンと深まり、保護者との関係も親密になって、つくづく保育園をやったよかった」と、その実感を語る。

保育の質を追求し 実践に活かすことが最重要

年々、入園児の数は増えていき、やがて100名を越すまでになった。そのため30年間で5度も増築をした。それも認可の基準に合わせた建物と職員配置を、子どもの環境を整えたいとの思いで行ってきたことから、費用面では苦労した。その後も、0歳児の申し込みがあまりに多くなったため、親の経済的負担を考慮して、認可保育所となって受け入れるようにしてきた。

それを支えてきたのは平山理事長の“子どもに対する教育”の熱い思いだった。

「もともと教育・エデュケーションの語源は、何かを教えるというより、その子が持っている力を引き出して、それを伸ばしてあげるといふ意味があります。ですから、子ども1人ひとりをよく見て、その子どもに合った、マンツーマンの教育・保育で引き出してあげることが基本として行ってきました。それは今も変わることはありません」

同時に職員に対しては、子ども



に向かう姿勢を強く求めてきたという。

「たとえば、背中にも目を持ちなさいとか、子どもの将来性を頭に入れて接しなさいとか、泣き声ひとつでも、どういう泣き声で訴えているのかを聞き分ける耳を持ちなさいと、口うるさく言ってきました。というのも、いまは少子化で、保育園も選ばれる時代です。近くにあった公立の幼稚園は定員割れが続き閉園に追い込まれました。選ばれるためには自ずと保育の質を高めなければなりません」と、保育の質を追求して行って、それを実践の場で活かすことが最重要のことだと考える。

マーチングバンドで 力を引き出し伸ばす

1人ひとりの子どもの力を引き出す具体的教育として行ってきたのが、マーチングバンドのリトル・エンジェルスである。大太鼓、小太鼓、トリオ、シンバルのリズム隊とシンセサイザーのメロディー隊、旗を振って演技するガード隊で構成され、各パートに合った性格の子どもを担当させることが重要だと、平山理事長はいう。

「積極性がある子には、それが伸びるパートを、協調性がある子には協調性のパートを担当させるなど、それぞれの子どもの性格が活かされるようにしているの

す。“one of them”ではなく“only one”で、1人ひとりが大事な1人であって、みんなで1つのものを作り上げる。その達成感、満足感を体験させる。そういう大きな目的が込められているのです」

楽器の演奏を教育に取り込んだのは、保育園を開園して間もなく、ハーモニカから始めた。

平山主任は「音を出す楽しさやみんなと合わせる楽しさを体験してほしいと、最初は手軽なハーモニカや鍵盤ハーモニカを教えました。すぐにできるようになる子どもがいる一方で、ゆっくりの子もいる。それでいいと思ったのですが、1人ひとりができることを伸ばしてあげようと考え、さまざまな楽器を使うマーチングバンドにしたのです」と、その理由を話す。

リトル・エンジェルス公式メンバーは4歳児からだが、3歳児や2歳児にもとてもよい刺激を与えているという。披露する場も地域の交通安全キャンペーンでのパレード、老人ホームへの慰問など数多く用意され、一番の晴れ舞台となるのは運動会だ。総勢500～600名の運動会となるので、近くの小学校のグラウンドを借りて行うほどだ。

子どもだけでなく、家庭からも地域のおじいさん、おばあさんから、社会からも愛される園を目指すこひつじ園。その中にあってリトル・エンジェルス活動は地域に根つき、地域との架け橋になっているといえよう。

(平成23年9月8日／取材協力・税理士法人タックス・イバラキ／構成・本誌編集部)